

5. 2年生のクエストエデュケーションの取組

(1) 先行実施と教材化に向けて

地域創造コースでは、2年生からクエストエデュケーションとして、生徒たちが自ら地域の課題解決に取り組みます。これまでは地域創造コースの前身となった探究活動の地域調査班のプロジェクトを事例に、クエストエデュケーションの実践検証を行ってきました。そこから見えてきたのは、探究活動として外部コンテストに参加することで活動評価を受けるようになると、生徒たちは自分たちの活動を他校の活動との差別化を強く意識するようになってしまったことでした。自分たちだからこそ実行できたアイディアは重要ですが、それが本校だけの特異的な活動になっていました。地域調査班として課外活動の成果発表として外部のコンテストを利用しましたが、その結果にこだわりすぎた結果だと分析しています。地域での学びは、その地域の特色は反映することはもちろんですが、様々な地域でも取り入れて実践してみたいくなる仕組み作りも大切だと考えています。本年度のクエストエデュケーションでは、この観点を重視して教材として取り組むことができるかを検証することにしました。

また、もう一つの観点として、2年生のクエストエデュケーションが始まると、グループ毎の小集団に固定されてしまう問題点が見えてきました。そこで、クエストエデュケーションがスタートする2年生においても、クラス全体や縦割り学年での短期プロジェクトが実施できないか実践検証を行いました。生徒にとってはグループでのプロジェクトと全体プロジェクトと並行した思考や作業が必要になるため、必要以上に負荷が大きくなるのではないかなど、実践前から大きな不安材料がありました。昨年度まで取り組んだ実践を経て、翌年度のカリキュラムに取り入れるにあたっての修正点を検証することにしました。

(2) 高校生による広告代理店

(学校と自治体・地域企業が一体となったプロジェクト事例として)

<活動のポイント>

- ①浜松市公式動画の企画・制作を通して、地域の魅力発信事業を実施
- ②2年生のクエストエデュケーションの先行事例として実施
- ③浜松市公聴広報課と「良い広告株式会社」と協働し、地域の魅力を発信する動画制作を行った。実際にプロの方の撮影や編集技術を用いて、企画提案からシナリオまでの監修も行った。
- ④単なる産業や観光紹介ではなく、戦隊もののストーリーを用いたシナリオづくりや演出を行うことで幅広世代に訴求する動画となるよう取り組んだ。
- ⑤浜松市の公式 YouTube にて9月より公開され、現在第4話までの公開中(全6話)である。

<活動の狙い>

これまでの活動でも、学校紹介や天竜浜名湖鉄道のイメージ動画などの制作にも挑戦してきました。しかし、これらはあくまでも自主的な制作であり、実験的な面や技術的な研修の場として位置づけていました。本格的な制作を行うには、撮影機材や編集技術の協力が不可欠とわかり、プロフェッショナルの力を借りて本格的な制作に取り組もうと考えました。

そこでこれまで生徒が行ってきた浜松市の地域魅力発信プロジェクトである「浜松胸キュンプロジェクト」を発展させ、浜松市の公式動画を制作することができないか考えるようになりました。地元企業の力を借りて公式動画制作のプロポーザル入札に挑戦するにあたり、制作する動画の企画やコンセプト案の制作・実際のシナリオ作り・出演交渉や演技指導など、制作に関わる多くの部分を生徒達自身で担うことにしました。一般的な「戦隊もの」のフォーマットを活用して浜松の魅力を伝える企画を練り上げました。生徒達自身が魅力発信の企画から制作受注・制作まで取り組む広告代理店として、デジタル時代に合わせたコンテンツの制作に取り組みました。

<実践紹介>

本年度取り組んだ一般的な「戦隊もの」のフォーマットを利用した「ご当地ヒーロー」の企画は、実は2020年1月には構想が立ち上がっていました。しかし、当時は撮影と編集の技術的な問題や衣装などの費用の問題があり、取り組むことができませんでした。同年4月に浜松市より公式動画制作のプロポーザルが提示されましたが、生徒の活動では入札に参加する資格を有していませんでした。そこで、入札資格をもつ本校保護者が在籍する企業の力を借りることで解決することができました。

浜松市の公式動画ということで、企画は慎重に行われました。制作するプロフェッショナルを交えて、具体的な企画のイメージを伝える会議を何度も重ねました。浜松市は人口約80万人の主要都市ですが、ゆるキャラグランプリでNo1になった「家康くん」以外に、ご当地ヒーローなどのコンテンツビジネスが行われていないという点に気がつきました。しかしこれまでの生徒達の地域との協働は、地域の企業やプロフェッショナルな方々に支えられてきました。そこで、「戦わないヒーロー戦隊」というコンセプトを掲げ、登場するヒーローにも怪人にもそれぞれの家庭や事情があり、戦いではなく協力して解決するという基本的なストーリーをくみ上げました。



▲制作会議の様子



▲撮影現場でのミーティング

浜松市からのヒヤリングを経て、10社ほどの入札の中から採択されました。動画の話題性や拡散性など、解決しなくてはならない問題がありました。採択決定後に、制作プロフェッショナルの方や浜松市役所の方を交えて、具体的な制作会議を重ねました。そこから、ヒーロー達は身近な教員に依頼することで日程を合わせやすくし、さらに卒業生のネットワークを用いた生徒の拡散力を活用するという方針を決定しました。さらに、ストーリーの動画に加えて浜松の魅力を伝える動画を加えた2部構成で、年間6本を制作することが決まりました。

実際の作業においては、撮影自体は業務用のクオリティを確保することができずプロフェッショナルの方々の力を借りることにしました。プロフェッショナルの方々からのアドバイスを受け、撮影を進行する絵コンテや台詞割り・香盤表を作成して、効率よく撮影を行う仕組みを実践しました。

撮影作業は多くの方々が参加することになったため、年間のスケジュールを組み進めることとなりました。6本の動画を制作するために、出演する教員の撮影日・浜松の魅力を伝える動画を撮影する日などに分け、合計で5日間の撮影を行いました。撮影中の生徒は、衣装の準備や台詞や演技のチェックや指導を行う役に回っていました。これまでの本校の活動は自分たちが演じて制作する表現が中心でしたが、自身が企画側に回ることで運営するノウハウを習得しようと努めてその場での撮影内容変更など判断を任されていました。



▲市役所での撮影の様子



▲浜松市長への完成報告

最終的には、2月末に最終話を公開し、初回は14,000再生を超える注目を集め、県外の方からも多くのアクセスをしていただきました。現在、来年度に向けた企画提案のために、アクセスログの分析を進めています。

<活動プロセス>

総時間 : 4~1月の10ヶ月間
成果 : 浜松市公式動画6本
使用機材 : 各自デバイス・ノートPC



▲今回の企画のメインビジュアル

<活動の検証>

これまで生徒が取り組んでいた地域の魅力発信プロジェクト「胸キュンプロジェクト」は、浜松市より「青春はままつ応援隊」に認定されていました。生徒達は自らの活動を「地域の魅力を発信する広告代理店」と捉えるように変化していました。その活動の中で、自分たちの活動趣旨に賛同してくださる企業と協働し、ポスター制作やPR動画の制作で地域に還元することを目指していました。しかし学校での活動のため、予算的な問題が常につきまといました。そこで保護者で入札権を持っている方にご協力をお願いし、浜松市の公開プロポーザルに入札しました。10社程度が参加する入札で、他社のアイディアに比べ生徒達の提案は高評価をいただきました。これまで自分達で積み上げてきた動画制作のノウハウを活かして、どの程度なら実現できるか、そして実現可能な範囲でどれだけ練り込んだ魅せ方ができるか、企画を立案した結果だと考えています。実現不能なアイディアではなく、実績をもとに協働するクライアント、今回は浜松市役所のニーズをどう満たすかという観点で企画を作成することができるようになったためでした。これは、本校での活動が自分たちだけしかできない特異性のある活動ではなく、汎用性の高い地域実践として行うことを指導者である私と生徒の間で共通認識できたからでした。この共通認識は、他の地域で自分たちのポスター制作活動を協働実践していく中

で、どうやったら活動を拡散できるか何度も試行錯誤してきた成果であると感じています。

また、本プロジェクトでは、生徒達の技術的・予算的な面に、それぞれプロフェッショナルの協力があったということです。撮影は少ない撮影候補日や時間の中で、修正する可能性を予測し 4K 画質で撮影し編集することが必要でした。生徒の機材や技術では実現できず、プロの力を借りることで実現し、撮影後トリミングしながら編集することができ効率が大幅にアップしました。入札した結果、浜松市から制作資金を調達することができ、協力いただく方々に業務として委託することが可能になりました。補助金を申請した活動ではなく、浜松市の公式業務として請け負うことで、生徒達にも責任感が生まれたように感じました。これまでの生徒達の活動の想いや制作したポスターや動画のクオリティが認められたからこそ、地域の方々が力を貸してくださる関係が構築できたと思っています。多くのプロジェクトで様々な企業と協働してきた効果が、本年度は大きく現れ始めました。

(3) 観光甲子園（教科横断的実践の事例として）

<活動のポイント>

- ①地域の魅力を活かしたインバウンド向け観光プランの構築プロジェクト
（フィールド調査の結果を活かした観光プランの構築と発信）
- ②2年生のクエストエデュケーションの先行事例として実施
- ③学校設定教科の「地域創造」で蓄積したフィールド調査の結果を活かした探究活動として、観光プランの構築過程を教材化に取り組んだ。
- ④これまでの活動で蓄積した地域の魅力を観光プラン化することで、取り組んだ内容を構造化したり、表現・プレゼンしたりする力の育成に取り組んだ。自分たちの活動や考えを外部からの視点で評価していただくことで、多面的・多角的な視野の育成につながっている。
- ⑤「住んでいる人が好きな街は、訪れる人も幸せな街」をコンセプトに、地場産業の魅力をプラン化した。2月に行われる決勝最終選考の全国6校に選出され、訪日観光部門でグランプリを受賞した。

<活動の狙い>

昨年度の観光甲子園では、天浜線を題材に取り組み、全国1位のグランプリを獲得することができました。その上級生達とともに活動した生徒達が、本年度も同コンテストにエントリーすることになりました。2年生のクエストエデュケーションとして取り組む中で、活動の狙いは大きく2つありました。一つは、感染症が拡大する中で観光業は大きな打撃を受けた状況の中、地方の観光産業が持続する可能性について検証することです。持続可能な観光を目指して、これまで生徒が地域との協働の中で取り組んできた活動である注染浴衣の魅力を、地域の観光資源として発信しようとして取り組みました。SDGsの観点を取り入れ、地方における持続可能な観光について、発表構成を論理的にくみ上げることを目的としました。

二つ目は、教科としての取り組みとして、外部からの評価を活用することができないか、検証することでした。本校での取り組み評価は、生徒間での相互評価と教師による行動評価を合わせています。しかし、評価は固定化されてしまう危険性があったため、外部の大会やコンテストを活用することで、生徒達の取り組みを客観的・多面的に評価する機会として活動できるのではないかと考えました。

以上の点から、これまで取り組んでいた地域の魅力を観光の視点から発信する動画制作というArtの視点を盛り込んだ活動の教材化について、検証しました。

<実践紹介>

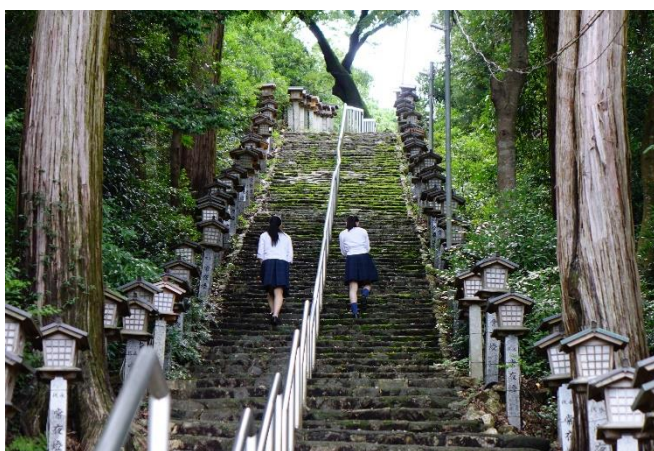
活動の始動は、昨年度の大会（2020年1月）の帰り道でした。上級生とともに参加した生徒が、先輩達の活動や他校の発表を見たことで、「自分たちも挑戦したい」という気持ちが芽生えていました。大会後の帰り道では、全国優勝した先輩達とともに、活用できる地域の観光資源についてのアイデアについての意見交換や、取り組む際の問題点や工夫について共有が行われていました。

新年度になると、自分たちのこれまでの活動を振り返り、地域の観光資源となるアイデアを検証していきました。生徒達が注目したのは、すでに協働4年目に突入していた注染浴衣でした。浴衣ポスターの作成だけでなく、自分たちの準制服への加工や浴衣イベントの実施を通

して、注染浴衣の魅力を十分に理解していました。また、卸メーカーの白井商事様だけでなく、染色工場の二橋染工場様とも何度も打ち合わせや試作で協働しており、注染染めの製造過程まで詳細に理解していました。このことから、単に浴衣を PR するのではなく、生地を織ったり、浴衣を染めたり、和裁をしたり、そんな製造過程も魅力と捉えることができました。

何度も議論を重ね、「浴衣生産の街から浴衣を着てみたくなる街」として観光プランを構築することが決まりました。浴衣を着てみたくなる街ということで、祭りや花火大会など特別な日の衣装ではなく、気軽に着ることで日常の生活に彩りを添えるという撮影コンセプトに決めました。浜松市内のフィールドワークを重ね、浜松市北部に広がる里山での撮影を行うことが決まりました。里山のどこか懐かしさを感じる景色が浴衣を着て歩いた懐かしい記憶と重なり、さらに人と自然が共存する里山の環境が持続可能な SDG s の観点に合致すると考えたからです。

撮影活動は、工場での取材を合わせると 10 回以上に及びました。今回制作するコンセプトは、懐かしい風景のなかに浴衣が溶け込む様子や時間とともに変化する空の色など一瞬一瞬のほかなさなど日本独特の美を表現することでした。そのため、今回の活動では浜松市北部の古民家を提供いただき、撮影拠点として動き、時間とともに変化する空気感など微妙な変化を捉える撮影に挑戦しました。地域の方に協力をお願いし、自分たちで浴衣の着付けを行えるように練習を行い繰り返し撮影に繰り出すことができるようにしました。昨年度の結果が認められ、多くの方が協力・応援してくださるようになりました。撮影データをもとに、イメージポスターと応募用動画の制作に取り組みました。今回は、職人さんによる一つとして同じものができない手作業での独特の滲みや発色を侘び、里山の景観や注染浴衣が色あせていく様などを寂び、日常の生活に浴衣が彩りを添えることを粋、と定義し、それをどのように映像で表現できるか試行錯誤を重ねました。この動画やポスターの制作については、本年度から機材を多く変更して、これまで多くの実践の経験を活かして自分たちが納得いくクオリティを追求していくことができるようになりました。また SDG s の視点から、地域の観光を捉え直し、経済・社会・環境の階層的な理解ではなく互いに関係し合い、その重なり合う領域に地域特有の文化が形成されるという独自の解釈を盛り込みました。



▲フィールド調査の様子



▲撮影活動の様子

約 600 エントリーの中から、最終の決勝に進出することができました。本来の決勝は、ステ

ージ上でのプレゼンテーション審査でした。しかし、本年度は感染症拡大によりプレゼンテーションを録画した動画とオンラインでの活動 PR で実施されることになりました。そのため、自分たちの理論がフローを意識した構成だったため、パワーポイントで制作せずに横長の黒板を用いてフローを意識させることを思いつきました。手書きの資料を黒板に貼り、カメラを移動させるアナログな趣向で、自分たちの構造的な試行を表現することにしました。一般的な方法やこれまでの自分たちの手法にこだわるのではなく、与えられた条件の中でどのようにしたら表現の工夫ができるか、最後まで試行錯誤を繰り返すことができました。

最終的に、観光甲子園 2020 訪日観光部門において全国 1 位となるグランプリを獲得することができました。



▲北部の里山での撮影風景



▲田園地域での撮影



▲オンラインでの発表の様子



▲浜松市長への表敬訪問

<活動プロセス>

総時間 : 4~1月の10ヶ月間
 成果 : 浜松市公式動画6本
 使用機材 : 各自デバイス・ノートPC

<活動の検証>

観光甲子園への挑戦は、2年生からのクエストエデュケーションの実践検証として取り組みました。昨年度の活動から、自分たちの地域の魅力の本質を観光の視点から捉えることは有効であると感じました。地域の観光資源をもとにしたクリティカルシンキングの必要性、そして地場産業の注染浴衣や里山の景観への想いを形にするため動画やポスター制作という自分たちの得意な Art の視点を取り入れることができました。どちらもすぐに身につくことではなく、長い時間をかけて地域の魅力発信に取り組んできた経験があったからこそだと感じています。さらに、昨年度までの取り組みとの違いは、デザイン思考を取り入れた点です。自分たちの思考を可視化することができるようになり、全体での共有化が進みました。生徒にとってこうした経験を積み重ねる帰納的な取り組みが、大きな自信や成果につながっていくことが実証できました。この2年に及ぶ観光甲子園の取り組みは、地域創造の授業として入学時からの実践の蓄積を反映し、地域を題材に様々な視点で自ら学ぶ系統性を検証することができました。

観光甲子園での実践では、生徒にとってはこれまでの取り組みを系統的に積み重ねていきましたが、指導する教員は生徒達の試行錯誤によるチーム全体のパフォーマンスが向上するようにコーディネートに徹しました。自分たちの想いを形にするこだわりから直前で動画を差し替えるという大きな変更も生じましたが、本気で取り組む姿勢があったからこそその決断であったはずで、生徒の中に地域への想いが強くなっていく過程を2年かけて見守ってきました。先輩達の取り組みに憧れた、そして想いを継承することで地域への誇りが生徒達の中に形作られていきました。地域の持続的な発展は、地域の魅力発信活動が持続することだけではなく、生徒たちの地域への想いが受け継がれていることも重要なのだと考えています。しかし一方で、長期のクエストエデュケーションで生徒達の活動に対する熱量を持続させることが今後の課題となりました。

観光甲子園の取り組みはESDの視点を用いた教科横断的な実践の検証が目的の一つです。ESDカレンダーにもあるように、多くの教科の先生方の協力をいただいて実践することができました。地域創造コースでESDの教科横断的な実践というと、各教科の授業の中での地域を題材に扱わなくてはならないと多くの先生方が考えていました。昨年の実績から、生徒が自分たちのアイデアを形にするために、統計や動画編集などそれぞれの場面で各教員の協力がありました。観光甲子園の動画制作では、英語字幕、情報での動画編集などさらに多くの教科の教員たちが生徒の熱量に教員も感化されていきました。教科横断的な取り組みは、生徒にとっても多様な個性や価値観を尊重し、それらを結びつける役割を果たしていました。「チームの生徒が発表・プレゼン・音楽などそれぞれに得意な分野を活かして創り上げる」という取り組みは、実践する様々なプロジェクトにおいて多様性は重視する観点の一つでした。ESDの教科横断的な取り組みは、こうしたそれぞれの持つ才能を結びつける効果が高いと感じました。教師達も分からないことはそれぞれに協力して解決する、そして地域のプロフェッショナルの方々の力を借りることで解決することができ、それによって生徒達のアイデアを形にすることができました。しかし得られる成果が多い反面、年間を通じた活動の負担は他のプロジェクトに比べて非常に多く、どの生徒でも取り組むことができる訳ではないことも事実です。観光という視点で地域を見ること、つまり観光資源を発掘することは地域の宝探しと考え、持続可能な域内観光の可能性について検討することは重要だと考えています。今後は、観光の観点をどのように教材化するか、さらなる検証が必要だと感じました。

●観光甲子園 2020 の E S D カレンダー

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
英語							英語字幕作成			プレゼン 練習		
数学		観光統計処理 理論の裏付け							データ 作成			
音楽		音源制作依頼										
国語			エントリー 書類				動画 テキスト ト	決勝 資料 作成		プレゼン 練習		
情報	情報収集		エントリー 書類	動画編集					データ 作成			
美術				動画撮影								
地歴	情報収集			撮影地選考								
地域	フィールドワーク		エントリー 書類	撮影プラン			決勝資料制作		プレゼン 作成	プレゼン 練習	結果振 り返り	次年度 勉強会

英語：英語でプレゼンや資料を作成する力

国語：文章だけでなくキャッチコピーや商品説明などの作品のイメージを生かす文章を作る力

数学：統計を処理したり、分析結果を読み取ったりする力

地歴：歴史的背景や地理的特徴・経済システムなどが実際の生活とどう関わるのか考える力

芸術：事後表現や魅力発進のツールとして、絵や音楽などの特徴を用いる力

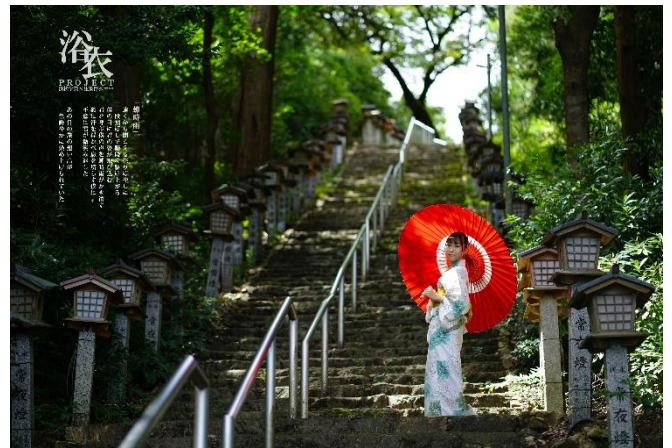
情報：プレゼンテーション資料など、コンピュータを用いて効果的に資料を作成する力

地域：多面的に地域の魅力を発信し現場や現地を丹念に調査し自分の目で確かめようとする力

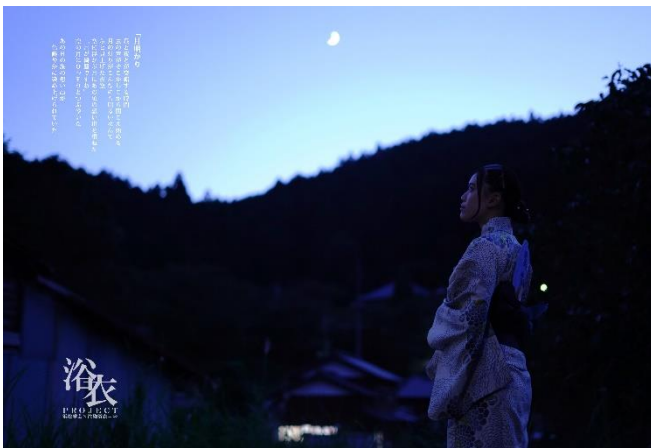
<観光甲子園で提案したポスター>



▲ポスター-1



▲ポスター-2



▲ポスター-3



▲ポスター-4



▲ポスター-5



▲ポスター-6

学校	都道府県名 静岡県	市町村名 浜松市	校名 浜松学芸中学校高等学校	作品名	浴衣が彩なす日本 ～浴衣の侘び・寂び・粋～
チーム名	社会科学部 地域調査班			メンバー	山田祐未佳・近藤優・相曾千鶴・山本果奈
課題	<ul style="list-style-type: none"> -アンダーツーリズムの受皿として地域が観光資源を発掘できていない。 -地域に残る文化的観光資源について住民の地域や文化への誇りが不足しており、地域内で完結するマイクロツーリズムを提唱する。 -マストツーリズムから脱却し、日本の文化や伝統に触れるArtツーリズムを提案する。 			協力者	GOAL: 17 株式会社白井商事(浴衣卸メーカー)・二橋染工場(注染染色工場)・ファッション着物いしばし(呉服屋)・森林公園 森の家(宿泊研修施設)・松井みか(ヤマハ音楽教室)
SDG 目標ターゲット	<p>GOAL: 8, 9, 10, 12 8.9 2030年までに、雇用創出、地方の文化振興・産品販促につながる持続可能な観光業を促進するための政策を立案し実施する。 12.8 2030年までに、人々があらゆる場所において、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようになる。</p> <p>GOAL: 1, 2, 3, 4, 5, 7, 11, 16 4.4 2030年までに、技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事及び起業に必要な技能を備えた若者と成人の割合を大幅に増加させる。 11.a 各国・地域規模の開発計画の強化を通じて、経済、社会、環境面における都市部、都市周辺部及び農村部間の良好なつながりを支援する。</p> <p>GOAL: 6, 13, 14, 15 14.1 2025年までに、海洋ごみや富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する。 15.4 2030年までに持続可能な開発に不可欠な便益をもたらす山地生態系の能力を強化するため、生物多様性を含む山地生態系の保全を確実に行う。</p>			動画ポイント	<p>ベテランの職人さんが作った浴衣を、地域の呉服屋さんで仕立て、そして私たちが着る。単に浴衣を生産して販売するだけでなく、思わず自分も浴衣を着てみたいと思えるシチュエーションや、片思いや恋愛・友情といった青春の風景を盛り込み、昔を懐かしく思えるような映像を作成しました。誰もが経験した青春時代の思い出を織り込み、色鮮やかによみがえる記憶を映像で表現しました。</p> <p>私たちは観光地ではなく、何気ない日常の景色に価値があると考えました。地域を学ぶ場から作るためにマイクロツーリズムを導入しようと考え、「知っている場所から行ってみたい場所への変化を促す」ために地域の魅力を伝える動画作りを心がけました。また観光を染色や和装体験や日本の生活文化を学ぶ場にしようと考えました。宿泊は、古民家を利用して日本の生活様式を体験する場に変えたいと願いを込めました。</p> <p>私たちがこだわる地域の観光資源は日本の原風景です。この景観は、人が自然と共存する中で長い時間をかけて形作られてきた里山の景色です。浜松でも都市開発が進んでいて、だんだんとこの里山の景色も減少しています。浜松市は海から山まで広がる広域都市です。この多く残る原風景の中を、浴衣を着て歩きたくなるような映像作りを心がけました。</p>
動画解説 200文字	日本の美意識や精神的概念の根底にある「侘び・寂び・粋」についてどのように訪日観光客に伝えるのか、それを地元の注染浴衣を用いて表現しました。職人さんが手作業で経験と勘を頼りに染めあげる過程を「侘び」、日常の生活や風景に彩りをそえる着姿を「粋」、去りゆく夏や夕暮れのもの悲しさを「寂び」としてオリジナルの音源に乗せて表現しました。何よりも私たちのお気に入りの注染浴衣の美しさを映像で伝えたいと思います。				

▲書類審査用の作成資料

＜今回の動画テーマ＞ 日本の美を伝えたい→Art Tourismを仕掛ける

日本の美意識

侘び
職人さんが手作業で経験と勘を頼りに染め上げる過程

寂び
去りゆく夏や夕暮れのもの悲しさ

粋
日常の生活や風景に彩りをそえる着姿

日本人の美意識を「侘び・寂び・粋」と捉え、浜松で生産が盛んである注染浴衣を軸として表現。

＜私たちの考える地域の持続性＞

「日本の美を創り出す職人技、和の型の部分を守る＝侘び」に繋がる。
浜松で生産した浴衣を着てもらいたい → 浴衣を生産する街から浴衣を着てみたい街への変化を促す。伝統産業を大切にしようという意識を広め、衰退が進む地方の企業の経済活動や地場産業を持続可能に近づける。この活動を受け継ぎ、地元の人たちが浴衣(伝統産業)の魅力を感じていく。実際に私たちの先輩が地元の染色を受け継ぎとしていた先輩もいる。

「染色の体験や反物から浴衣になるまでの工程を知ってもらった上で和の世界を味わう＝寂び」
染色や日本の生活様式を体験し、日本の本質を知る。
観光を一つの学習の場と捉え、新しい学びや発見できることを目指す。


「環境」は伝統産業を守ることに大きく関わってくる。
「日本の懐かしい景観と浴衣の場に応じた華やかさ＝粋」
浴衣が浴け込む日本の風景は人と自然が共存することによって守られている。その景観を守りたい。
伝統産業はその地域の風土に根付いており農業、気候、様々な条件が関係している。この環境を守り、産業を持続させる。

つまり... ウエディングケーキモデルからパンケーキモデルへ！
住みやすい街づくりをするためには経済、社会、環境の3つが繋がっていて、文化と密接な関係にある。このような観光を提案する上ではSDGsのウエディングケーキモデルのイメージではなく、経済、社会、環境の輪が重なり合うイメージになるのではないかと私たちは考えた。それを私たちはパンケーキモデルと名付けた！SDGsと向き合うためには経済の優先順位が高くなるわけではない、という考えにたどり着いた。3つがどれも欠けることなく揃うことでその地域に住む人が住んでよかったと思える街になり、それが訪れた人が訪れて良かったと思える街になると思う。これが私たちの理想の観光に対する思いだ。経済、社会、環境3つが平等に揃ってこそ持続可能な発展に近づき、私たちの求める日本像になると思う。

侘び・寂び・粋とSDGsを基に、浴衣を軸とした日常に生きる日本の心を表現。高校生ならではの視点で青春の風景を映像に盛り込んだ。


侘び

実際に職人さんの想いを技に託し手作業で丁寧に染め上げる姿は繊細で奥深さを感じさせる。一つ一つ違った表情を写し出す。




寂び

時間の経過と共に古びて、味わいのある様子。淡い恋心を抱きつつもその思いが届かないもどかしさを演出。



粋

日本の夏の風景にマッチする華やかさを持った浴衣。味わいのある風景に浴け込んでいく浴衣で私たちの日常に彩りを添えた。



＜ストーリーとみどころ＞

皆が集まって話したり、恋をしたり、時には片思いをして好きな人で頭がいっぱいになったり、そんな青春時代を思い出させるシチュエーションを取り入れた。密かに恋をして大切な人を持ったけれどその恋が届かない、惨い気持ちになるのも青春の一つ。最後の花火でその気持ちも表している。そんな私たちの何気ない日常にこそ価値があることを伝え、地元の魅力に気付いてもらいたかった。浴衣を軸として「住んでよかったと思える街が訪れて良かったと思える街」という思いを描きながら動画制作をした。伝統ある街だからこそその景観を大事にし、浜松城付近の城下町の雰囲気などを取り入れた。また、どこか懐かしさを感じさせ、親しみの持てる、日常の生活に浴け込むような映像を構成。もちろん浴衣を着てお祭りに行くこともあるが、私たちがこの活動をするにあたって求めているのは日常の風景と浴衣のマッチ。「浴衣を着て出かけたくなる街」を表現。味わいのある風景と注染浴衣の美しさを動画で伝えたい。

必ず1枚以内にとまとめて下さい。 ※ 指定フォーマット以外の資料添付は無効となります。

▲大会で高い評価を得た資料(生徒作成)

(3) 浴衣イベント「浴衣 DeNight」の実施

<活動のポイント>

- ①浜松市科学館での単独浴衣イベントの実施
(地場産業の魅力発信活動)
- ②教育旅行での魅力発信活動の先行事例として実施
- ③制作したポスター・染色した反物を使った浴衣・創作盆踊りと、これまで取り組んできた地場産業の魅力発信の成果報告としてイベントを活用した。
- ④浴衣生産の街から浴衣を着てみたくなる街への変化を促すため取り組んできたオリジナルの染色や創作盆踊りの活動成果を、地域へ還元する発表の場として取り組んだ。
- ⑤来場者や地域の方に向けてのアピールだけでなく、市の公式イベントとして行政との連携を行うことができた。またイベントを見た他企業からの出演オファーへと繋がった。

<活動の狙い>

昨年度、本校では、「モノづくりの街から、コトづくりの街への変化」をテーマに取り組み、創作盆踊りのイベントを実施してきました。地場産業の浴衣に注目して活動していましたが、オリジナルの浴衣を生産するにはかなりの費用がかかることが課題でした。その解決策として地場産業の注染浴衣を PR するというスタンスは変えず、「浴衣生産の街から浴衣を着て出かけたくなる街への変化」と促すことを狙い、イベントの実施に挑戦しました。本年度は、感染症の拡大により参加型のイベントはほとんどが中止になってしまいました。今回は昨年度のイベントをご覧いただいた浜松科学館様から、季節イベントに合わせてオープニングイベントとして実施して欲しいと依頼を受けました。参加型から見学型のイベントへ変更することが求められましたが、自分たちの浴衣 PR の手法は変えず、どのように見せるイベントを運営するか挑戦するプロジェクトとなりました。

<実践紹介>

本年度、浜松市北部「フルーツパークでの浴衣 DeNight (単独開催)」と中心部「和装展 (静岡県繊維協会主催)」で予定していたイベントが中止となってしまいました。イベントの運営を担当していた生徒は、自分のクエストが実施できずにいました。そんな中、浜松科学館様からの依頼を受けて、イベントの変更案を検討しました。「来場した方々に見せる」という観点から、MC による注染浴衣や自分たちの取り組みを紹介することにしました。

これまでのイベントは、参加型ということで円になって踊る盆踊りのフォーマットを採用していました。しかしそれでは来場者の方々に見ていただくことはできません。そこで、ショー形式にすることで、隊列や移動を盛り込み振付を目立つようにしました。イベントで使用する曲も懐かしさを感じる構成や、注染浴衣のポスターや柄を紹介してファッションショー形式にするなど、アイデアの変更に取り組みました。本年度は地域創造コースの生徒が参加するため、大人数の編成をすることができました。

実際に準備に入ると、人数が多い分、パフォーマンスの質に差が出るようになりました。上級生が全体を統括することで、MC・振付・ポスターや柄の紹介・音響役など分担していきました。それぞれの役割に上級生が指導役につき、チームでの運営をすることになりました。上級生は以前にイベントを実施していたため、その際の経験を活かしてスムーズに準備を進めるこ

とができました。



▲イベント前の活動紹介

▲イベントの様子

実際のイベントは、浜松科学館前のデッキスペースを利用して行いました。梅雨明けが長引いて雨交じりの天気となりましたが、約 30 分のイベントとして注染浴衣ファッションショーと創作盆踊り 4 曲を披露しました。科学館の来場者だけでなく、地域の方々にもお越しただけました。自分達のイベントフォーマットを使いながら、状況や依頼内容に合わせて変更して実施することができ、生徒にとっても大きな自信となりました。



▲ポスターと柄の紹介

▲感染症に配慮した会場運営

<活動プロセス>

総時間 : 4～7月の4ヶ月間
成果 : 浜松科学館でのイベント
使用機材 : YAMAHA-PA 機器

<活動の検証>

「ものづくりからことづくり」への変化を行うことは、本校の実践として大きな挑戦でした。昨年度は、浜松市北部への関係人口増加を狙ったイベントを単独運営することでした。その結果、「創作盆踊り」のフォーマットは、地域のイベントから多くの依頼をいただけるようになりました。しかし、本年度の感染症の拡大により、予定していたイベントはことごとく中止になってしまい、生徒のモチベーションは大きく低下してしまいました。それでも自分たちの注染

浴衣の PR する機会を実現しようと、浜松科学館からの依頼に対して試行錯誤を繰り返していました。今回の取り組みは、上級生が指導者となり、1年生から3年生までの縦割りプロジェクトとして実施しました。

プロジェクトの実施期間としては、それほど十分な時間が確保できていませんでした。上級生はすでに自分達でイベント運営の経験があったため、音響やステージ配置などスムーズに進めることができていましたが、1年生との協働では苦戦しました。ステージパフォーマンスはもちろん、表現することに対しては上級生との大きな差がありました。その差は単なる技術や経験の差ではなく、活動への熱量の差であると感じました。上級生は先輩達と共に苦労してイベントのフォーマットを作り上げ、注目されるようになりました。その想いを引き継いで活動しており、企画を立ち上げる苦労を共有してきました。本年度は年度当初の学校閉鎖期間があり、1年生に登校開始後すぐに振付や MC の指導に入ってしまったため、そうした学年を超えた協働の時間を作ることができなかつたためでした。本校で取り入れているチームビルドは、こうした問題を改善するために有効であると感じました。クエストエデュケーションは、グループに分かれての活動になってしまい、どうしても個々の活動に固まってしまう。学年を超えたプロジェクトの運営やチームビルドを通して、協働する体制を作る必要があると感じ、こうしたコースとしての体制づくりの課題が大きく残りました。



▲イベントの様子



▲イベントの告知(本年度は感染症により中止)

6. 他校との協働による実践の教材化への取組

(1) 白山高校との取り組み（教材のフォーマット化）

<活動のポイント>

- ①三重県立白山高校との地域魅力発信ポスター協働制作プロジェクト
（本校ポスター制作プロジェクトによる魅力発信の教材化検証）
- ②2年生のクエストエデュケーションの先行事例として実施
- ③本校が得意として取り組んできた Art の力で地域の魅力発信するプロジェクトとして実施した。綿密なフィールド調査と地域魅力を再発見し、これを美術、特に画像編集の技術を用いてポスター化に取り組んだ。
- ④「地域の魅力は観光地など特別な場所ではなく、自分たちの日常にあふれている」という、これまでの実践を通じて生徒が感じてきたことを、他地域でも共有するための取り組みとして実践した。さらに、本校だけでなくポスタープロジェクトが他地域でも単独実践できるように、教材としてのプラットフォーム化をするための問題点の検証を行った。
- ⑤2 日間の合宿としてアイデアソン形式で行い、教材として活用する際の展開方法について検証できた。白山高校のバックアップもあり、完成したポスター作品は現地ニュースでも取り上げられた。

<活動の狙い>

これまで取り組んできた本校のポスター制作プロジェクトである「胸キュンプロジェクト」や、昨年度の青森県立鱒ヶ沢高校との協働実績をご覧いただいた三重県立白山から協働の打診をうけました。本校で取り組んできた天竜浜名湖鉄道との協働である「天浜線勝手に応援団」の取り組みを、白山高校のある地域を通る「名松線」で実施したいとのことでした。

昨年度の実績では、3 日間という短期間でポスター制作を行いました。しかし、協働で制作するということに主眼を置きすぎ、活動の有効性やポリシーの共有までには至りませんでした。そこで、今回の協働実践では制作活動から活動報告までをパッケージ化することを目指しました。活動を通して本校生徒の変化だけでなく白山高校の生徒の中でどのような変化が起こるかを検証し、教材としての効果を考察することも目的としました。

<実践紹介>

活動は年度当初にオンラインでのメンバー交流でした。交流当初は白山高校の生徒は活動に対して消極的で、学校の授業だから取り組んでいるという状況でした。合同で活動する 10 月までにどのように活動の熱量を上げるか、その課題に向き合うことでした。そこで本校生徒と白山高校生徒と共同の掲示板を SNS 上に設置し、お互いの情報交換ができるようにしました。しかし、なかなかテキストでの意見交換は進まず活動が停滞したため、白山高校の生徒がフィールドワークで撮影した現地の写真などをアップしてもらいこちらの生徒のアイデア構築の参考にし、本校から自分たちの作成したポスターをアップすることでゴールイメージを共有することにしました。事前の活動を通じて、自分たちでもフィールドワークを実践することにしました。

事前に、活動フィールドとなる名松線の全線を生徒達とフィールドワークを行いました。事

前に活動の舞台となる地域を調査することで当日の撮影時間を短縮し、活動の質を向上させることを目指しました。事前の情報共有では、白山高校側からは「何もよいところがない」という言葉を聞いていました。実際にフィールドワークをしてみると、本校の生徒達からは「撮影してみたい場所がたくさんある」という好意的な印象でした。事前のフィールドワークを通じて、実際の活動では日常の何気ない風景の価値を共有することを目指しました。

活動当日は本校生徒 2 年生 3 名、1 年生 3 名の 6 名の生徒で実践しました。金曜日の午後から活動が開始し、活動紹介と白山高校近くの名松線駅での撮影デモを行いました。オンラインでは伝わりにくかった撮影のこだわりや試行錯誤の様子を共有することで、少しずつ両校の生徒が打ち解けていくのを感じました。

2 日目は終日の撮影活動となりました。両校の生徒がカメラを持ち、始発駅からの撮影がスタートしました。両校の生徒が各駅でシチュエーションを決め、撮影を繰り返していきました。天候の悪化もあり、予定より早く拠点となる白山高校に引き揚げることになりました。白山高校では、写真の選定やポスターに添える言葉を分担し、両校の混成グループを作り共同で制作していきました。最終的には 11 枚のポスターを完成させることができました。



▲本校の活動紹介の様子



▲両校での撮影活動

3 日目は成果発表を実施しました。朝から発表に向けて、活動の振り返りを行い報告資料の作成に取り組みました。本校生徒の自分たちの思いを自分たちの言葉で伝えたいという気持ちと、原稿を用意したいという白山高校の生徒との間で齟齬が出ていました。両校の生徒が協働して報告準備をする中で、自分たちの思いを伝えたいという気持ちも共有されていきました。最終的に、自分たちで作成したポスターをもち、成果報告を実施することができました。完成したポスターは、現在、校内だけではなく松阪駅や津駅にも掲示されており、地域の方々に高い評価を得ていました。



▲成果報告の様子



▲完成したポスターを全員で報告

<活動プロセス>

総時間 : 協働活動 3 日間 + 10 時間程度

成果 : 名松線ポスター 11 種

使用機材 : SONY α7RⅢ・FE85mm・PhotShopCC・ノート PC

<活動の検証>

昨年度、鯉ヶ沢高校との協働から始まった他地域での本校プロジェクトの教材化の検証でしたが、制作に主眼を置いたため制作品のクオリティは確保できましたが活動の検証が十分ではありませんでした。そこで今回の実践では、3 日間という期間でのアイデアソンとしての実施時間の検証と、活動を通じた生徒の変化を追うこととしました。

まずは実施時間の検証です。3 日間の協働時間は合計 20 時間でした。これは他校での活動が総合的な学習の時間で実践されるということ想定して設定したものでした。終日活動している時間があつたため、実際には 20 回の総合的活動時間で達成できる訳ではありません。そこで制作活動の時間に余裕を持たせ、年間総合的学習の時間の半分を地域の活動に費やすという構想でした。事前のフィールドワークを含めても年間を通じた総合的学習の時間で達成することができ、地域の魅力を発信する教材として他地域でも実践することができると検証できました。必要な機材や制作ソフトも一般的に入手可能なものであり、制作した成果品も地域に還元しやすい素材なのではないかと感じました。

次に、活動後の生徒の変化について検証しました。本校生徒は、自分たちの活動フォーマットを実践する指導役でした。なかなか活動趣旨が共有できない中、自分たちの活動ポリシーを実演して見せることでなんとか白山高校生徒と共有できないかと考えていました。なかなか予想通りに進まない中、活動を通じて名松線沿線に広がる景色に心を引かれて行きました。次年度も白山高校と協働したいと思うようになり、沿線地域の関係人口となることができました。こうした他地域との協働を行うことで、相互の関係人口の構築とともにプロジェクトの実施を通じた相互の学校交流を行う教育的な旅行（または短期の留学）として実施できる可能性があるのではないかと考えています。

さらに、白山高校の生徒の変化を追ってみました。白山高校生徒への事後振り返りのポイン

トは①活動の感想、②活動前後の変化、③地域に対する思いの変化、3点でした。

①活動をしてきた感想

私の人生の中で、初めてモデルを経験させて頂きました。撮影時は、とても緊張して、顔の表情や、その場所での立ち方など、普段、気にしないところまで気にするもので、とても難しかったです。複数の写真を撮るうちに慣れることができてきました。浜松学芸高校さんと協働プロジェクトを行うことができて、私にとって、良い思い出になったし、一生、忘れられない宝物です。

①活動をしてきた感想

最初、綺麗に撮ればいいかなとか思っていて、軽視していたんですが、この活動をしていく中で一枚のポスターを作成するという決して軽視してはならない一枚の責任の重さなどを感じました。
ポスターが完成した時の心の揺らぎは今でも忘れません。
達成感がすごかったです。本業としてもいい経験ができました。

上記のように地域で活動した経験が強く残り、学校や地域への愛着が生まれる機会になっていると感じました。成果品だけではないこうした生徒の心情的な変化は、このプロジェクトの大きな特徴であると感じています。

②やる前とやった後でどのような変化があったか

私には、ただの「通学電車」の名松線でした。2時間に1本の電車だったため、寒い時に電車を待つことが苦痛でした。それが、浜松学芸高校のみんなと一緒に撮影させてもらい、普段、目にもとめなかった。名松線の美しい風景に気付かせてもらいました。

②やる前とやった後でどのような変化があったか

最初、どんな活動なんだろうと思いき「イメージ」がうきうきつかめず、軽視している形になってしまいました。

ですが、浜松学芸高校さんとアレンをさせていただいた日から、このあり方が違っていて、活動をしていく中で、さらに深くまでこの活動の良さや、ポスター作成のこだわり、見ていた人がおかしな感じのようなポスターを作成する違う視点から見て作成していく。私たちも一枚のこだわり方なども変化がハッキリと現れました。

活動の前後変化は最も大きな変化が見られました。白山高校の生徒達の中にあっただのは自分たちの学校や地域、そして生徒自身への強い自己否定感でした。しかし、私たち外部の視点によ

り地域の「良さ」が再発見されると、白山高校の生徒の中でも地域に対する肯定的な感覚が芽生えていきました。こうしたよそ者の視点が地域の変化をもたらすには大きな効果があり、本校のポスタープロジェクトはこの外部の視点を取り入れやすい教材となっていると実感することができました。

③地域に対してどのような思いを持つようになったか

入学してきた時は「何も無いやん」と感じはばかりでした。そして白山高校へお越しし、この活動をしていく中で「この地域」の良さを知ることができました。周りからは「何も無いと思われし（しい）がちなのですか」、こういった何も無い所だからこそ、地域の良さを深く知ることができ、知ることができると思っています。地域の良さを深く知ることができると思っています。そういったことができた地域だからこそ、いい地域な人ばかりかなと思っています。

たった3日間という短い期間でしたが、生徒同士の協働だったからこそ、白山高校の生徒の地域に対する変化を生み出すことができたのだと感じました。また、本校生徒が自分たちの活動であるポスター制作へのクオリティを妥協せず取り組み、地域の魅力を切り取るポスターを制作できたからこそ、その完成品が白山高校の心を動かすことができたと考えています。Artの視点をを用いた取り組みは本校のプロジェクトの根幹でした。その言葉や地域の壁を越えるArtの力は、こうした地域の魅力を伝える活動には有効であると実感できました。



▲ポスター1



▲ポスター2

(2) 鱒ヶ沢高校との取組（発信と外部評価）

<活動のポイント>

- ①青森県立鱒ヶ沢高校と協働したポスタープロジェクトの実践報告発表
（地域魅力化の取り組みの発表と外部視点の導入）
- ②3年生のクエストエデュケーションの先行事例として実施。最終的な成果発表として、成果発信の可能性を検証した。
- ③ビジネスの観点をを用いた全国各地の様々な取り組みを発表する場であり、活動を通じた相互交流や他者の視点を取り入れる機会として有効である。また客観的な評価の場を設けることで、生徒の取り組みの目標として位置づけている。
- ④地域の魅力を発信する場として、外部評価を得られるだけでなく生徒同士の交流の場があるため、広い視野の育成に大きな効果があった。
- ⑤交流の結果から、青森県立鱒ヶ沢高校との協働に発展したように、本校の活動フォーマットを広めていく効果があった。また、教材としての有効性が認められ、三重県立白山高校との協働プロジェクトへとつながった。

<活動の狙い>

2019年度に青森県立鱒ヶ沢高校と協働実践したポスタープロジェクトは、新聞などで大きく取り上げられ地域の観光冊子の表紙にも採用されました。その活動成果から本年度は三重県立白山高校との協働へ発展し、さらに来年度は熊本県立天草拓心高校や三重県立紀南高校との協働へ拡大して行く予定です。教材としての活動検証は、生徒を対象に白山高校の実践で行いました。しかし、学校設定科目としての評価において外部評価を受けるという点は検証することができていませんでした。そこで、本年度は鱒ヶ沢高校とのポスタープロジェクトの実践を報告し、質疑応答などの経験を積み外部評価を受けることを目標としました。

<実践紹介>

外部審査評価として選んだのは、鱒ヶ沢高校との協働するきっかけとなった第5回全国高校生SBP交流フェアでした。両校とも参加の経験があり、全国の高校生に向けての発信の機会となるからでした。感染症の状況もありましたが、両校の距離が離れていることもあり、オンラインで企画から練習までを進めていきました。

両校で日程を決め、オンラインミーティングを実践していきました。最初の頃は、オンラインミーティングで詳細な話し合いをしようと試みていましたが、やはり意思の疎通がうまくできず内容を共有することで精一杯でした。そこで、生徒たちは事前に見てもらいたい資料を作成して送信しておき、それを元に確認をすすめていく方法をとりました。ICTを活用した打ち合わせに戸惑っていましたが、回を重ねる毎にコツをつかんでいったようでした。

参加したコンテストは、A4で6枚にもおよぶ応募資料取り組みの書類審査、活動を紹介するポスターの前で発表するポスターセッションによる予選、プレゼンテーション資料を作成して行うオーラルセッションによる決勝と、3段階に分かれています。顔を合わせて練習や作業することができないハンディキャップをどう乗り越えるか苦戦しました。生徒たちは、応募資料はどちらかの学校が作成するのではなく、両校で作成したものをすり合わせる方法を選択しました。また、ポスターセッションはオンラインとなったため、両校で同じものを使用する必

要がありました。そこで、本校で配送可能なサイズに分割したキットを作成し、それを鰯ヶ沢高校へ送ることになりました。これにより、同じポスターを使用して、同時展開することが可能になりました。無事に書類選考と予選を勝ち抜き、決勝への進出が決まりました。



▲ポスターセッションに向けて制作の様子



▲ポスターセッションの様子

決勝のオーラルセッションを前に、生徒たちから新しい提案がありました。オンラインでの発表になるため、決勝では両校の画面が分かれてしまう事が問題点でした。そこで、同じ発表資料を使うのではなく、画面が分かれてしまう事をメリットに変え、それぞれの画面で異なる発表資料を投影し表示可能面積を2倍にしようと考えました。両校2画面で、それぞれ交代で発表は進めますが、表示画面は相互で異なる内容を表示する方法をとり、プレゼンテーション資料の制作に入りました。プレゼンテーション資料の切替えタイミングを記入した原稿を共有し、オンラインでの練習を重ねました。その都度、相互に変更点を共有しプレゼンテーションデータの修正を何度も行いました。両校の生徒が最後まで何ができるか、何が改善できるか考え、挑戦し続けてくれました。その結果、第2位となる三重県知事賞を受賞することができました。



▲決勝のプレゼンテーション 1



▲決勝のプレゼンテーション 2

<活動の検証>

今回の挑戦は、自分たちの活動に対して大会やコンテストを利用して外部評価を受けることが目的でした。自分たちの活動が地域で評価されてくると、自己肯定感が高まるのと同時に自分たちの活動を客観的に評価することが難しくなってきました。そのため、自信をもって活動してきた成果が外部の大会では評価されないという現象が見られるようになってきました。

実際にコンテストや大会に出て行く中で、「理論の構築・プレゼンテーション資料の作成・発表技術・質疑応答の対応力」を重視しました。実際に活動していくなかで、これまで自分の活動を論理的に説明できない部分が出てきました。これは、自分達の活動が Art という視点を用いており多くの人たちの共感を生みやすい反面、それを言語化することが難しいということを示していたのだと考えています。発表の当日まで試行錯誤を重ね、どうしたら伝わるかとメンバーの中で対話が繰り返されました。互いのアイデアを尊重しあうだけの活動を重ねてきたからこそ、この「対話力」を身につけることができました。理論の構築や発表技術も、この対話伴う共有によってそれぞれがその能力を大きく伸ばすことができたと感じました。活動の中で小さな成長を繰り返し、発表や質疑の能力も積み重ねられて成長することを実感し、活動を持続させることや系統的な学びを尊重することの重要性を再認識することができました。

また、今回の挑戦では、協働して取り組むことで他校生と自分たちの活動ポリシーを共有することができ、活動の拡散に繋がるかという可能性を検証していました。本校の活動は Art の表現力を活用した制作という点に注目されがちでした。しかし、一番伝えたいことは「生徒達が何気なく過ごしている日常・地域にこそ価値がある」ということであり、本校の協働プロジェクトはその地域の宝をさがす機会を提供することでした。今回の活動の中で、鱒ヶ沢の生徒からは自分達の地域がこれほどまでに受け入れられるのだという驚きがあったと聞きました。鱒ヶ沢の生徒には本当に当たり前の日常の景色だったのかもしれませんが。その景色に多くの地域の方々はもちろん、県内外の方々からも反響があったと聞いています。その結果、鱒ヶ沢高校の生徒からさらに協働を進めて活動の回転力を上げたいと望んでいただけることができました。2年にわたりポスタープロジェクトを実施した結果、生徒が指導役となって協働が進むことで制作の技術だけでなく、想いが広げることができる教材として非常に有効であると実感することができました。今後も様々な地域と協働し、教材として活動を広めて行きたいと考えています。

7. 今後の課題と展望

究2年目となる本年度は、全体目標として計画したカリキュラムの検証、クエストエデュケーションの先行実践検証の2点を設定しました。

カリキュラムの検証については、高校1年次の実施日程に基づいた実践を行い、時間、順序の変更や系統性の検証を重ね、カリキュラム化することができました。学校設定教科の科目として「地域創造（概論・実践）」で実施し、5つのプロジェクトが段階に応じて系統的な到達目標になるよう、実践カレンダーを制作しました。また、教科として評価方法の実践・検証し、地域創造の授業を通じて、自己肯定感や将来に向けての意識が高まっているのを確認することができました。またポスター作成の取り組みを教材としてパッケージ化も進み、三重県立白山高校との協働実践で検証を行いました。協働制作によって、地域魅力発信に大きな効果があることを確認できたとともに、この活動が自分たちの地域だけでしか実施できない教材ではなく、幅広い地域の学校へ拡散できる教材として大きな手応えを感じました。

クエストエデュケーションでは、地域の魅力を発信するポスターやCM制作に取り組み、広告代理店という立ち位置でプロジェクトを実行しました。魅力発信においては、特にSTEAM教育のArtに注目し、Artを「アイデアを形にする力」と捉え、プロジェクトの成果や発信にデジタル技術を多く取り入れてきました。県内のテレビ局や浜松市の公式動画の受注・制作につながり、活動の広がりを感じました。このクエストエデュケーションの成果を、校外の外部評価の場として全国規模のコンテスト3件（第5回全国高校生SBP交流フェア・2020全国高等学校グローバル観光コンテスト・東京女子大学ビジネスプランニングコンテスト）に参加し、全国大会本戦で取り組み内容をプレゼンしました。第5回全国高校生SBP交流フェアでは全国2位、観光甲子園2020訪日観光部門では全国1位となるグランプリを2年連続で受賞するなど高い評価をいただき、生徒の自己肯定感を高めるとともにクエストエデュケーションの成果発表として有効であったと感じました。

本年度は、新しく地域創造コースを普通科の中に設定し、地域の魅力発進に教科として取り組んできました。そのプロジェクト型学習を通じて生徒の中に大きな変化が現れ始めました。次の資料は生徒の1年間の活動を振り返った資料です。地域でのプロジェクトを通じて、生徒の中に多様性を受け入れる姿勢や自分の中に興味関心が増していく変化が出てくることを、生徒自身が自覚できていたことでした。これは地域での学びが知識という学力ではなく、生涯学習の視点や多様性を受け入れる考え方など、地域で生きていく上で重要なライフキャリアについて触れている点でした。地域での学びは、こうした生徒の成長を促すきっかけとなる大きな可能性を秘めていることが最大の発見でした。

<1年生の年間振り返りより>

私はまだ考え方が大きく変わったと思います。学芸高校に入ってプロジェクトをやるようになるまでは、「個性」に対してあまり良いイメージをもていませんでした。「みんな違ってみんないい」と人はよく言いますが、自分とは異なった考え方や価値感に対して批判することが多いと思っていたからです。個性と大事に生きることは、周りから批判され嫌な思いをするようになると思っていたため、「個性」や「みんな違ってみんないい」と聞いてもただのきれいな事にしか聞こえませんでした。ですが1年を通して、プロジェクトを行う中で個性がないと完成しきれない場面が多いことに気づきました。それぞれの個性があってそれぞれの個性を生かすことで、出来ることになり役割が決まってきた。それを合わせるとプロジェクトが完成していました。個性はないほうが楽に生きられると思っていたものが、個性があるからこそ楽しい。みんな違うから1つにはれると思うようになり、個性に対する悪いイメージがなくなりました。

中学生のころは遊びやゲームなどにしか興味がわからなかったけれど、ここで色々なことを経験して、「どの分野でも深く知ると楽しい」ということに気がついてから、様々なことに関心があったりと好奇心旺盛になりかけた。深く知り、自分の考えを持つことでその考えをみんなに伝えるようになったことも成長したなと感じました。ぶつかることがあってもそれはお互いが自分自身の考えを深く持つ、しっかりと相手に伝えられたからこそだからとてもうれしいです。

(1) カリキュラムと評価の検証

本年度は地域創造コースの高校1年生用のカリキュラムとして構築した5つのプロジェクトを実施し、学びの系統性を検証しました。次年度は、高校2年生としてクエストエデュケーションを実施するため、1年間の地域魅力発信の取り組みから、高校3年生に向けて系統的に学びをどう深めるか点が大きな課題です。自分たちの地域内への発信はもちろん、外部のコンテストや報告会を利用して、外部の視点から地域での取り組みの評価を受けることを学びの系統性に組み込みたいと考えています。

(2) 実施プロジェクトの継続性

本年度も、教科横断型の実践として、地域の魅力を詰め込んだ観光プランを構築する観光甲子園に挑戦しました。この観光プロジェクトは、SDGsの観点を取り入れた構想・動画制作・プレゼンテーションの3点から成っており、プロジェクトリーダーの私だけでなく美術や英語・情報の教員と協働で指導に当たりました。これにより、多くの視点で地域を捉えたり自分たちの活動を振り返ったりする機会を得ることができ、プロジェクトの実施には大きな成果となりました。またコース初年度は3名の教員がプロジェクトの実践にあたったため、多様な視点を取り入れた活動を行うことができました。プロジェクト型学習において教科横断型の取り組みでの協働体制や教職員の共通理解はこれからも大きな課題です。本研究3年目として、こうした教科横断の協働実践を積み重ねていき、学校全体での共通実践に移行できるよう体制の整備を進めていきたいと考えています。

(3) 学びの有効性

上記でも述べたように、成果の発信は大きな課題として残っており、本年度のように多くの方々を集めることができない状況が想定されます。次年度は、外部の大学や団体のコンテストや報告会を通じて、外部の視点から本校の取り組みの評価をうける機会を設定したいと考えています。地域魅力化はその地域限定の魅力や取り組みだけでなく、魅力化の方法を検証することに意義があると考えています。生徒達の実践を様々な地域でも取り入れることができる魅力化の実践例として、フォーマット化を進めていきたいと考えています。

8. 新聞掲載・メディア放送一覧

(1) 新聞掲載

生徒の活動 観光パンフに

町が鱒ヶ沢高SBP研の成果活用



撮影した光景随所に

鱒ヶ沢町は鱒ヶ沢高がSBP研の活動成果をまとめた観光パンフレットを作成し29日、研究会メンバーに発表を行った。昨年、浜松学芸高校（浜松市）の生徒と共に取り組んだ「地域魅力発信活動」で撮影した町のさまざまな光景を随所に盛り込んだ。

（山崎 悠）

研究会は地域に活用し、地域を盛り上げる取り組みを推進している。取り組んでおり、昨秋が表紙担当の全国的なSBP交際の全国大会で、JR遊フナを築橋に交流、鱒ヶ沢駅構内を写したのが始まり。浜松学芸高校と取り組む活動にも随所、がター果として、一緒に町内で使用し写真や動画を撮影し、キャッチコピーを考えた。一冊のパンフレットと「プロジェクト」として、町が観光パンフレットを制作した。研究会メンバーによる人気投票で選ばれる。

SBP研究会の活動成果が盛り込まれた観光パンフレットを手にする町中主幹補佐と研究会メンバー。

あのまち このまち 地域ワイド

町が鱒ヶ沢高SBP研の成果活用

研究会は地域に活用し、地域を盛り上げる取り組みを推進している。取り組んでおり、昨秋が表紙担当の全国的なSBP交際の全国大会で、JR遊フナを築橋に交流、鱒ヶ沢駅構内を写したのが始まり。浜松学芸高校と取り組む活動にも随所、がター果として、一緒に町内で使用し写真や動画を撮影し、キャッチコピーを考えた。一冊のパンフレットと「プロジェクト」として、町が観光パンフレットを制作した。研究会メンバーによる人気投票で選ばれる。

SBP研究会の活動成果が盛り込まれた観光パンフレットを手にする町中主幹補佐と研究会メンバー。

▲2020. 6. 1 陸奥新聞



認定を受けた浜松学芸中・高校の社会科学部地域調査班と地域創造コースのメンバーら。浜松市役所で

地域の魅力 動画・図鑑で

浜松学芸中・高を認定

浜松市は「百、地域の魅力を掘り起し、発信する高校生団体の認定制度」を「青春はまっつ応援隊（アオハル隊）」として、浜松学芸中・高校（中区）の社会科学部地域調査班と地域創造コースを認定した。本年度の第一号で、同団体の認定は三年連続二回目。

部活動としての社会科学部と、普通科地域創造コースで構成する「はまっつ胸キュンプロジェクト」には七十四人が所属。本年度は、地域の魅力を紹介する

戦隊ヒーロー仕立ての動画の制作や、遠州弁を収録した図鑑の製作に取り組み。市役所での認定式には、メンバー六人が参加した。奥家章夫市民部長から認定証を受け取った社会科学部地域調査班部長の山田祐未佳さん（二年）は「高校生にしかできないと、この機会に、地域の魅力を発信したい」と話した。同プロジェクトは、五年前から地域や地場産業の魅力を発信する活動を続けている。（渡辺真由子）

▲2020. 7. 4 中日新聞



浜松学芸中高生活動へ意欲 「アオハル隊」認定

浜松市は3日、浜松を新たにした。学芸中高(中区)の社市役所であった認定学芸部地域調査班と式では奥家章夫市民部地域創造コスを青長が、山田祐佳さん春はまつ応援隊(高校2年)らに認定称「アオハル隊」に認証や隊員証を手渡し定した。生徒は浜松の「可能性は大きく広が魅力の掘り起こしや情」ついている。ぜひ頑張っ報発信に向け、気持ち「ほしいと激励した。アオハル隊の認定を受け、笑顔を見せる生徒ら。

浜松市役所 浜松の魅力発信した

胸キュンプロジェクトにも輝く姿、多くトに取組んでいる。の実績を残した。昨年は注染め浴衣のPRを目的に、浴衣を着て創作踊りを、浴衣イベントなどに加わり、浴衣イベントを舞台にした動画で観光甲子園ランパ(浜松総局・草茅出)と抱負を述べた。同部は5年前から、地域や地場産の魅力発信する「はまつ

▲2020. 7. 4 静岡新聞

注染そめや遠州織物紹介

高校生 浴衣でダンス

浜松市西区の浜松科学館で17日、伝統の「注染そめ」や「遠州織物」を紹介するイベント「注染・ゆかたレクシオンinみらい」(同館主催)が始まった。コロナ禍で夏祭りの中止が相次ぐ中、地場産を盛り上げようと初めて企画した。19日まで。

初日は浜松学芸中高同区の生徒約30人にまらアッコシヨイを行った。華やかな柄の注染めめめ浴衣を着飾った生徒が、自分たちで振り付けを考案したというダンスを披露し、来場客業しました。曲の間には注染めめめの特徴や柄の豊さを紹介した。イベント代表を務めた同校2年の大石美亜さん16は「多くの人に知っていただけて良かった。今後も注染そめや浜松の魅力発信し続けたい」と笑顔で語った。18、19の両日は「注染」の表演や体験が開かれる。(浜松総局・足立健太郎)



浴衣を着てダンスを披露する生徒＝浜松市西区の浜松科学館

▲2020. 7. 18 静岡新聞



浴衣姿の高校生 「注染そめ」PR

浜松、歌や踊り披露

高校生による「浜松注染そめ」の浴衣のファッションショーが、浜松科学館（浜松市中区）であった。色とりどりの浴衣を身にまとった生徒が、歌と踊りで会場に集まった観客を沸かせた。

ショーには、浜松学芸高校（中区）の社会科学部地域調査班と地域創造コースの三十一人が参加。自分たちで考えた、浴衣が映える振り付けで四曲を披露した。曲の合間には浴衣の柄の紹介もあった。従来、浴衣

注染そめの浴衣を着て魅力をPRする高校生。浜松市中区の浜松科学館で

の柄は数字で区別しているが、今回は注染そめの魅力をより知ってもらおうと、生徒が模様や色から名前を考案。クリーム色の生地に青色と黄色で花を描いた浴衣は「月陽花」、紺色に白色の花が描かれた落ち着いた雰囲気浴衣は「麗蹠」など、自由な発想の名前で浴衣をPRした。

代表の大石美亜さん（二年）は「風を通して涼しいのが浴衣の特徴。踊っているもさらさらした着心地だった」と話した。

ショーは、同館が七月から始めた月一回の特別企画「夜の科学館」の一環。「オトナが楽しむサイエンスな夜」をテーマに、大人向けのプラネタリウムやサイエンスショーを開催している。（渡辺真由子）

▲2020. 7. 22 中日新聞

浜松学芸高生が 天浜線ポスター

静岡で魅力紹介

浜松学芸高（浜松市中区）の生徒が手掛けた天竜浜名湖鉄道（同市天竜区）の魅力発信するポスターを集めた展示会が6日、静岡市葵区の松坂屋静岡店で始まった。29日まで。

同校の「天浜線勝手に応援団」が地域の魅力発信を目的に取り組む活動の一環で、全39駅にちなんだポスターを制作した。日常の何げない風景に青春や友情の要素が盛り込まれ

ている。本館2階から6階に39枚のポスターを展示。フロアを巡りながら同線東端の掛川駅から西端の新所原駅までの旅気分を味わうことができる。



天竜浜名湖鉄道の魅力を伝えるポスターが並ぶ会場
＝静岡市葵区の松坂屋静岡店

▲2020. 9. 7 静岡新聞

何げない風景に、青春と友情を一。浜松学芸高校（浜松市中区）の社会科学部地域調査班の生徒が天竜浜名湖鉄道を「勝手に」PRしたポスター展が6日、静岡市葵区の松坂屋静岡店で始まった。29日まで。（谷口武）

浜松学芸高生がPRポスター

松坂屋静岡店で展示始まる



ポスター展の準備をする浜松学芸高生たち＝静岡市葵区の松坂屋静岡店で

天浜線39駅に青春風景

ポスター作成は二回目。掛川―新所原（湖西市）の全三十九駅と活動紹介のバネル二枚を合わせた、計四十一枚が同店二・六階に並び。作品は「僕」や「私」は出版社で培った経験を、生かして、画像処理や松坂屋の目線から、恋や友情をイメージした。共感や懐かしさを呼び起す仕掛けになった。ポスター作成の責任者を務めた二年の近藤優さん（森町）。駅のホームで走りながら、振り向いて手を振ってくれる彼女を捉えた。ポスターに苦勞し、二百枚ほどから厳選したと話す。

写真共有アプリのインスタグラムでは、公式アカウント「はままつ胸キュンプロジェクト」を開設し、活動で撮った写真を投稿している。

▲2020.9.7 中日新聞

若者向け魅力発信動画 浜松市公開 高校生が企画出演



浜松市はこのほど、松学芸高（中区）の生の魅力を高校生や大生らが企画、出演した学生らに知ってもらうPR動画「浜松戦隊や情報発信事業として浜ライマイカー」（全6話）

「浜松戦隊ヤライマイカー」特設サイトのトップ画面

の第1話を動画投稿サイト「YouTube」で公開した。動画の内容は、かつての戦隊ヒーロー5人組がアラフォー世代になり、再び街の平和を守るため立ち上がるストーリーで、随所に浜松の歴史や文化などが盛り込まれている。事業者を公募型テロポータル方式で募集し、同校との連携による動画制作を提案した市内の広告代理店が受託した。シナリオは同校地域調査班の2年生

が事業者と一緒に考え、同校教諭が戦隊ヒーロー5人組として出演。生徒も登場する。動画の内容を詳しく解説する特設サイト定。

＜https://hamamatsusentai.com/＞も開設した。第2話以降も毎月1回、のペースで公開する予定。

▲2020.10.2 静岡新聞

森林公園の魅力発信へ

浜松学芸高校（浜松市中央区）の地域創造コース二年生四十八人が一日、浜北区の県立森林公園をPRする動画とポスターの制作を始めた。二日までに、九十秒の動画とポスター（写真）十二枚でカレンダーを仕上げ

同校では三年前から「森林公園勝手に応援団」の名称で、社会科学部地域調査班の中・高校生が同公園のPR活動をしてきた。本年度からは高校普通科に地域創造コースが新設されたことから、授業の一環として地域活性化を目標に取り組むことになった。

初日は動画とポスター班に分かれて、木工体験館やスポーツ広場など園内数カ所を撮影を開始。生徒自ら



PRカレンダー用の撮影をする生徒＝浜松市浜北区の県立森林公園・木工体験館で

がモデルとなり、演出や構成、BGM、振り付けなどを企画し、高校生らしい若

さあふれる内容の映像を撮影した。映像やポスターは今月末までに編集作業を終え、報告会で森林公園側に公開する予定。ポスター班ディレクターの横村美優さん（ひ

は「コンセプトは、高校生には『共感』、大人は『どこか難しい』という作品に仕上げたい。カレンダーなので各月の季節感を表現できるように工夫して公園の魅力を発信したい」と話していた。

（伊藤一樹）

▲2020.10.2 中日新聞



森林公園PRへ動画

浜松学芸高校ポスターも制作

浜松学芸高校地域創造コース1年生48人が1日、県立森林公園（浜松市浜北区）をPRする動画とポスターの制作を始めた。3日までに、初日は木工体験館やスポーツ広場などを撮影場所を選び、踊る様子や雑貨作りを楽しむ場面を動画や写真に収めた。同コースプロジェクトリーダーの大木島詳弘

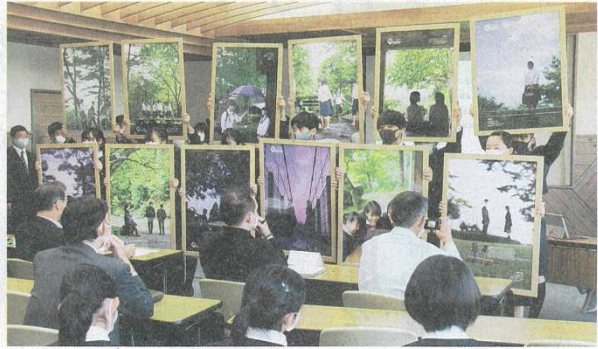
教諭(46)の助言を受け、構図などを工夫して何度も振り直していた。ポスターは四季の公園と生徒たちをテーマに、カレンダー用としても使えるよう最大12枚を制作する。動画はオリジナル曲に合わせダンスなどを披露する90秒の作品に仕上げる。ポスター制作班の横村美優さん(16)は「高校生は共感し、大人は懐かしさを感じるような作品にしたい」と意気込む。大木島教諭は「地域の魅力に触れ、ベーパーテストでは計れない感性を養ってほしい」と授業の狙いを話している。

（浜北支局・松浦直希）

▲2020.10.3 静岡新聞

県森林公園 魅力プレゼン

浜松学芸高生 動画・ポスター完成



報告会で四季折々のポスターを発表する生徒。浜松市浜北区の森林公園「森の家」で。

浜松学芸高校（浜松市中区）の地域創造コース一年生四十八人が、浜北区の県立森林公園をPRする動画とポスターを制作した。園内の研修施設「森の家」で、プレゼンテーションを兼ねた報告会があった。地域活性化を目標に取り組み授業の一環。生徒自身が構成やコンセプトを考えて今月一、二日に撮影した。動画は九十秒で「自分たちが楽しむ」がテーマ。ポスターの写真はカレンダーを考えた十二枚で「若者には共感、大人には懐かしさ」をコンセプトに、どちらも若々しい青春像を盛り込んだ。

動画は、軽快なリズムのオリジナル曲を全編に挿入。園内のスポーツ広場やつり橋、松林、階段などの各所でダンスを披露して、躍動感あふれるシーンが展開されている。ポスターは四季折々の表情を見せる園内の風景に合わせて、生徒たちが衣装を変えて雰囲気づくりをしている。

報告会を終え、森の家指定管理者のヤタロー観光事業部・渡部尚樹統括マネージャーは「ポスターは、すぐにも来年度の卓上カレンダーとして採用したい」と高く評価した。動画は森の家ホームページで公開する予定。（伊藤一樹）

▲2020.10.27 中日新聞

観光甲子園決勝に
浜松学芸高が進出
PR動画で競う

一般社団法人「NEXT TOURISM（神戸市）は1日、高校生がつくる観光PR動画のコンテスト「観光甲子園2020」の決勝大会に進出する全国12校14チームを発表した。550を超え、外国人に日本の魅力を伝える「訪日観光部門」（6チーム）、米ハワイ州を紹介する「ハワイ部門」（4チーム）、新設した「日本遺産部門」（4チーム）の3部門。

各チームは来年2月7日に神戸市で開かれる決勝大会で、3分間の動画に5分間の解説を加えて発表。部門ごとにグランプリと準グランプリが決まる。

各部門の決勝進出校は次の通り。

【訪日観光部門】白河（福島）、本郷（東京）、浜松学芸、松山東（愛媛）、与論（鹿児島）2チーム	【ハワイ部門】札幌（北海道）
【日本遺産部門】水戸工業（茨城）、愛知商業（愛知）、金光学園（岡山）、鳥取西（鳥取）	【ハワイ部門】札幌（北海道）
【日本遺産部門】水戸工業（茨城）、愛知商業（愛知）、金光学園（岡山）、鳥取西（鳥取）	【ハワイ部門】札幌（北海道）

▲2020.12.2 静岡新聞



浜名湖の魅力ポスターで発信

浜松学芸高（浜松市中区）の生徒が浜名湖で撮影したポスターの常設展が30日、西区呉松町のホテル「KAReN Hamana」で始まった。天竜浜名湖鉄道の寸座駅（北区細江町）や西気賀駅（同）周辺などで撮影した11点を、今後入れ替えも行う予定。頭装されたポスターを設置する生徒＝浜松市西区

浜松学芸高生が制作 西区のホテル 常設展

制作したのは課外活動に取り組む同校社会科学部の地域調査班の1、2年生計6人。浜名湖の魅力を発信するポスターで「いつか行くみたい」と思わせる場所を探した。生徒がモデルも務めて撮影した。ポスターはホテルの玄関やカフェなど館内各所に展示。吹き抜ける潮風はどこか懐かしいかおりがした」といった生徒の詩を重ねて掲載している。

常設展示のきっかけは、同班が昨年9月に静岡市内で行った同鉄道の魅力を紹介するポスター展に、同ホテル運営会社の高橋秀幸社長が訪れたことだった。高橋社長は「高校生の視点で浜名湖をPRして」と同ホテルでの展示を依頼した。監修役の2年生近藤優さんは「浜松にこんなに良い所があるんだと知ってもらえたらうれしい」と話した。

▲2021. 1. 31 静岡新聞



湖はいま
浜松学芸高生6人
ホテルにポスター

浜名湖の魅力を伝えようと浜松学芸高校（浜松市中区）の生徒が制作したポスターが、西区呉松町のホテル「KAReN Hamana」に飾られている。

ポスターを作製したのは、課外活動に取り組む社会科学部の地域調査班の1、2年生6人。高校生が目線で浜名湖の良さを伝える「浜名湖プロジェクト」の一環で、生徒自らが撮影場所探し、撮影を行い、モデルにもなった。

責任者を務めた2年生の近藤優さんは「浜名湖を訪れた大人が昔を懐かしむのがテーマ。大人ももちろん、私たちの同世代にも魅力が伝われば。まねして写真を撮ってもらえたらうれしい」と話す。

ポスターには浜名湖周辺の桜やタンポポなど春を感じさせる風景や美しい夕日の見える景色と共に、「吹き抜ける潮風はどこか懐かしいかおりがした」といった詩を添えた。

プロジェクトは今後も続けていく。今回は第1弾として天竜浜名湖鉄道の寸座駅や西気賀駅など、奥浜名湖周辺で撮影した11点を展示している。季節ごとにポスターを入れ替える予定。（広瀬美咲）

▲2021. 2. 5 中日新聞

自然と青春テーマ

浜松学芸高 森林公園カレンダー作製

浜松学芸高地域創造コースの1年生47人が、県立森林公園をアピアールする2021年度版の写真付き卓上カレンダーを作り、代表として、浜松市同公園の同公園の森の家



卓上カレンダーや、カレンダーに掲載した写真のハネルを持つ浜松学芸高の生徒。浜松市浜北区の森の家

カレンダーの写真は園内で過ごす生徒たちの青春がテーマ。水辺でほだしになって遊んだりつり橋で物思いにふけったりといった姿を、20年10月に撮影した。カレンダーは1部500円で、200部を森の家や同公園ハーブショップで売っている。同校はこれまでも同公園のPRカレンダーを部活動で作ったが、今回は同コースの授業の一環として販売計画なども考えて作成した。山本果奈さん(16)は同公園近くに住んでいるといい「慣れ

親しんだ森林公園の魅力を、カレンダーを通じて多くの人に伝えたい」と話した。(浜北支局・松浦直希)

▲2021. 2. 7 静岡新聞

浜松学芸高がグランプリ

観光甲子園決勝 注染浴衣でわび表現

高校生が観光に関する魅力や課題を分間の動画で紹介し、出来栄を競う「観光甲子園2020」の決勝大会が7日、神戸市で開催された。外国人に日本の魅力を伝える「訪日観光部門」では、浜松注染浴衣の浴衣で日本のわびさを表現した浜松学芸高のプレゼンテーションが、その魅力を伝える「訪日観光部門」では、有松絞の技法や魅力を紹介した名古屋市の愛知商



「観光甲子園2020」の「訪日観光部門」でグランプリを受賞した浜松学芸高のプレゼンテーション (ユーチューブから)

▲2020. 2. 8 静岡新聞

「観光甲子園」訪日観光部門 浜松学芸高 グランプリ



「観光甲子園2020」の「訪日観光部門」でグランプリを受賞した浜松学芸高のプレゼンテーション (ユーチューブから)

高校生が観光に関する魅力や課題を分間の動画で紹介し、出来栄を競う「観光甲子園2020」の決勝大会が7日、神戸市で開催された。外国人に日本の魅力を伝える「訪日観光部門」では、浜松注染浴衣の浴衣で日本のわび、さびを表現した浜松市の浜松学芸高、米ハワイ州を取材して観光のありべき姿を構想する「ハワイ部門」では、海洋汚染などの環境問題を学ぶ「環境問題」をテーマとした東京の本郷高、日本の伝統文化の活性化を考える「日本遺産部門」では、有松絞の技法や魅力を紹介した名古屋市の愛知商高が、それぞれグランプリを受賞した。大会は一般社団法人「NEXT TOURISM」(神戸市)が主催、五百五十を超える応募の中から勝ち上がった十校十四名が代表として参加。決勝は、インターネットライブで中継され、新型コロナウイルスの影響で、高校生らは会場に集まらず、画面越しに制作の意図や背景をプレゼンテーションした。

▲2021. 2. 8 中日新聞

森林公園の魅力満載

浜松学芸高生 カレンダー完成

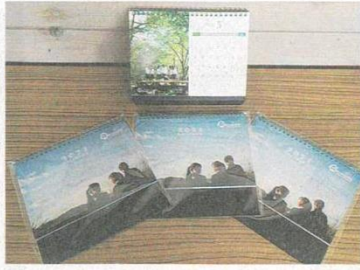
県立森林公園（浜松市浜

北区）の魅力を広めようと、中区の浜松学芸高校・地域創造コース一年生四十八人が企画した写真付きの二〇二一年度用卓上カレンダーが完成した。園内の研修施設「森の家」とビジターセンター・バードピア浜北の二カ所で、一部五百円

で販売している。

森林公園のカレンダー制作は今回で三回目。一七年、部活動の探究活動として生徒が天竜浜名湖鉄道を紹介するカレンダーを制作したところ、「森の家」支配人の目に留まり依頼したのが始まり。本年度からは高校普通科に地域創造コースが新設されたことから、授業の一環として地域活性化をテーマに制作した。

昨年十月一〜三日、季節感を入れながら生徒自身が構成やコンセプトなどを考えて撮影。カット数は約二千枚に及び、その中から若者の感性で選んだ十三枚（一枚は表紙）を使用。雨降りや女子生徒に傘を差し出す男子生徒、小川での水遊び、スイカとラムネを



浜松学芸高校・地域創造コース1年生が制作した卓上カレンダー

傍らに縁側で会話する様子などがある。

カレンダーは、二百部を限定販売。七日には生徒代

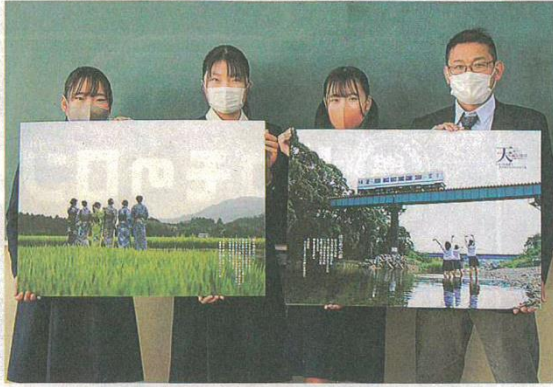
表がカレンダーを納入した。山本果奈さん（こ）は

「どのカットを使うかで苦労したが『森林公園に行き

たい』という気持ちになってくれるカレンダーです」とPRしている。

（伊藤一樹）

▲2021.2.9 中日新聞



生徒が力を合わせて制作したポスター

自分が暮らす地域の魅力について考えたことはありますか？ 高校生が魅力を伝えるために、地元企業や団体と関わりながら農産物を使った新しい商品を考えたり、SNSやアートの伝えたり、あらゆる方法で地域を盛り上げています。地域貢献活動を行うことで、視野が広がり、今まで気付かなかった自分の住む街の良さを発見できます。

ふじのくにNPO活動センターは、県内の高校生による社会貢献活動を発掘し、活動の内容や成果を表彰する「静岡県ハイスクールボランティアアワード」を行っています。同センターの今村昌弘さんは、「高校生は柔軟な発想で積極的に取り組んでく

くれます。同アワードで受賞歴のある浜松学芸中学校・高等学校社会科学部地域調査班は、5年前から「浜松の魅力を伝えたい、盛り上げた」と熱い思いを抱き、生徒がイベントの企画から運営、ポスターや動画の企画から

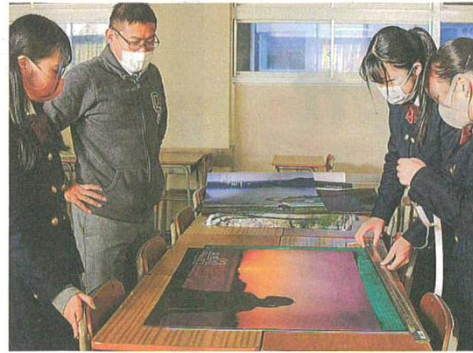
魅力を発信



れるので、新しい貢献活動が生まれます。現在は、新型コロナウイルス感染拡大により行動が制限されていますが、SNSを駆使するなど環境に応じた方法で地域の活性化に取り組み続けてほしいです」と話

制作を手掛けています。例えば、「浴衣生産の街から浴衣を着たくなる街」をコンセプトにした盆踊りイベント「浴衣DENIGHT」や、甘酸っぱい写真とキャッチが魅力的なポスターや動画、フォトブックやカレンダーの制作など活動は多岐にわたります。また本年度から「地域創造コース」が

新設され、地域の魅力発信に授業としても取り組んでいます。部長の加藤さくらさんは「この活動を通して浜松が大切に大好きな場所になりました。持続可能な地域にするために、街中だけを盛り上げるだけでなく地域の文化や環境も守り続けたいです」と話します。地元「好きなところ」を探して、自分にできる地域貢献は何か考えてみましょう。



ポスターの細部をチェックする生徒

▲2021.2.16 静岡新聞 (子供向け)

天浜線舞台 恋心描く

天竜浜名湖鉄道をPRするポスター制作などに取り組む浜松学芸中・高（浜松市中区）の「天浜線勝手に応援団」はこのほど、生徒が脚本・撮影などを手掛けた天浜線のPR動画を天竜一俣駅（同市天竜区）でお披露目した。監修者で浜松市在住の小説家いぬじゅんさんも同席し、動画の完成を祝った。



監修者のいぬじゅんさん（右から3人目）と動画をお披露目した「天浜線勝手に応援団」のメンバー＝浜松市天竜区の天竜一俣駅

浜松学芸中・高生が動画制作

遠江一宮駅を舞台に、高校生の淡い恋心を描いた1分20秒の動画を制作。天浜線を舞台にした小説を発表している、いぬじゅんさんの世界観を反映した動画作りを目指した。

駅舎での発表会で、出演者5人が同鉄道の松井宜正社長らに向けて公開。制作のモチーフや天浜線への思いなどを語った。いぬじゅんさんは「切ない中にちゃんと希望が見える作品」と評価した。

動画制作を取り仕切った大石美亜さん（高2年）は「小説から感じる青春の切なさ」と、なつかしさを感ずる天浜線の風景をうまく表現できた」と話した。

動画は同鉄道公式ホームページで公開。応援団では、今後も新しいPR動画を制作する予定。（天竜支局・垣内健吾）

▲2021.3.14 静岡新聞

市内の魅力発信活動報告

浜松学芸高生市長と懇談

鈴木康友浜松市長が市民と昼食を取りながら意見交換する「チャット！やらまいか」が18日、市役所で開かれた。浜松学芸高（中区）の社会科学部地域調査班の1、2年生6人が、浜松の魅力を紹介する動画やポスターの制作活動を報告した。



浜松の魅力発信に向けた活動を報告する浜松学芸高の生徒＝浜松市役所

う「観光甲子園」の訪日観光客増を2連覇を達成。2月の大会では浜松注染そめの浴衣を着て紹介した。山田祐未佳部長（2年）は「ブレイクヤラマイカー」も動画的に紹介した。

ユーブで公開。山田和待副部長は「自分は掛川市出身だが、市内の級友より浜松のことに詳しくなった」と話した。鈴木市長は「魅力を発信したいという熱い気持ちがある」とPRに感謝した。

▲2021.3.20 静岡新聞

森林公園PRの 学芸高に感謝状

運営協

県立森林公園運営協議会は10日、浜松市浜北区の同公園のアピールに協力した浜松学芸高地域創造コース1年生に感謝状を贈った。

同公園森の家で生徒代表のセライヤ桜さん(16)に手渡した。生徒は2020年度、公園の広場やアカマツ林などで踊る動画撮影して喜んだ。



感謝状を手渡した片田課長(後列左から3人目)と、贈呈を喜ぶ生徒。浜松市浜北区の森の家と、生徒がモデルになって園内で撮影した写真付きのカードを作成した。セライヤさんは「地域のためになる活動を続けたい」と話し、ほかの代表生徒らと一緒に撮影して喜んだ。

▲2021.3.21 静岡新聞



感謝状を受けた浜松学芸高生代表と片田哲利協議会理事(後列左から3人目) 浜松市浜北区で

森林公園協、学芸高生に感謝状

利用者増 動画で貢献

県立森林公園運営協議会は、コロナ禍の中、PR動画などで同公園(浜松市浜北区)の利用者増に寄与したとして、浜松学芸高校・地域創造コース1年生に感謝状を贈った。昨年10月からPR動画を県内の公共施設や県庁などで公開したところ、前年比で二割近く利用者が増えたという。

園内研修施設「森の家」で贈呈式があり、片田哲利協議会理事から生徒代表のセライヤ桜さん(16)に表彰状が手渡された。セライヤさんは「三日間かけて制作した動画だったが、たくさんの方が訪れ、大変うれし。来年の一年生にも頑張ってもらいたい」と笑顔を見せた。

動画は昨年十月一〜三日に撮影。生徒自身が構成やコンセプト、振り付けなどをすべて考えて「スポーツ広場」やつり橋の「空の散歩道」など、若者目線で園内の風景とダンスを取り入れて制作した。

(伊藤一樹)

▲2021.3.24 中日新聞

(2) テレビ放送



▲SBSテレビ 「sole いいね！」



▲SBS テレビ 「元気!しずおか人」2020.5.10



▲SBS テレビ 「元気!しずおか人」2020.5.10



▲NHK 「JapanRailways」